

平成二十六年 度

博士（文学）学位請求論文

内容及び審査の要旨

神田 ひろみ

加藤楸邨研究―作品の形成と俳句観の推移―

皇學館大学大学院

神田ひろみ氏の博士(文学)学位請求論文「加藤楸邨研究―作品の生成と俳句観の推移―」は、現代俳句を代表する加藤楸邨(明治三八年・一九〇五年〜平成五年・一九九三年)の俳句作品の生成とその俳句観の推移について論述したものである。本論は、第一章、第二章、第三章に分けられ、序章と終章が付く。さらに付章として「年譜と文献」が添えられ、本論が序章の「加藤楸邨先行研究史」をはじめとする、母念な基礎的研究に支えられて成立したものであることを示唆している。

以下、目次に沿ってその概略を説明する。

□ □

序章は、「第二節 加藤楸邨先行研究史」と「第二節 楸邨作品の時代区分」とから成る。

第一節には、昭和十一年から平成二十四年までの書籍や雑誌に発表された楸邨についての先行論文から、作品の生成と俳句観に関する主要な論文八三点を採り上げて検証した。その結果、以下の三点が明らかになった。

- 一、 楸邨はその俳句活動の出発時点から、俳壇において注目され評価を得ていたこと。
  - 二、 戦中の俳句活動に対して戦後は評壇から批判を受け、戦前と戦後にその評価の違いがあったこと。
  - 三、 昭和四二年刊行の句集『まぼろしの鹿』以降、現代俳句の大家と目され、晩年に至る多彩で独自の句境が再評価されていること。
- 楸邨没後二〇年が過ぎ、その句業の全体が見通せる時代になったが、最晩年の作品等についての先行研究はこれまでまだ僅かしかない。本論文では、特に楸邨の最晩年に開花した多彩で独自の句境に焦点を当てて考察する。

また序章「第二節 楸邨作品の時代区分」においては、これまで検証されていなかった俳句活動全体を視野に入れて楸邨作品の時代区分を行った。その結果は、以下のようである。

①初期(二六歳―四〇歳)

昭和六年(一九三一)―昭和二〇年(一九四五)

第一句集『寒雷』昭和一四年三月、交蘭社刊。

第二句集『颯風眼』昭和一五年三月、三省堂刊。

第三句集『穂高』昭和一五年一二月、甲鳥書林刊。

第四句集『雪後の天』昭和一八年二月、交蘭社刊。

②中期（四一歳―六〇歳）

昭和二十一年（一九四六）―昭和四〇年（一九六五）

句文集『沙漠の鶴』昭和二十三年二月一五日、大日本雄辯講談社刊。

第五句集『火の記憶』昭和二十三年五月、七洋社刊。

第六句集『野哭』昭和二十三年二月一日、松尾書房刊。

第七句集『起伏』昭和二十四年七月、榛の木書房刊。

第八句集『山脈』昭和三〇年一〇月、書肆ユリイカ刊。

③後期（六一歳―八八歳）

昭和四十一年（一九六六）―平成五年（一九九三）

第九句集『まぼろしの鹿』昭和四十二年一二月、思潮社刊。

句文集『死の塔』昭和四十八年九月、毎日新聞社刊。

第一〇句集『吹越』昭和五十一年六月、卯辰山文庫刊。

第一一句集『怒濤』昭和六一年一二月、花神社刊。

書句集『雪起し』昭和六十二年五月、求龍堂刊。

遺句集『望岳』平成八年七月、花神社刊。

□ □

第一章「初期作品の考察」では「第一句集『寒雷』の研究―「翺雲人に告ぐべきことならず」を軸に―」を置き、その中で、時代区分①初期の『寒雷』中の注目句「翺雲」の句について論じた。句集『寒雷』は三部に分けられ、その第一部「古利根抄」からは「行きゆきて深雪の利根の船に逢ふ」、第二部「愛林抄」からは「かなしめば鴟金色の日を負ひ来」の一句ずつを採り上げて考察した。第三部の「都塵抄」は、「古利根抄」及び「愛林抄」とは句風が一変し、この「都塵抄」中の「翺雲」の句が師の水原秋櫻子から「難解」と指摘されたこと、そのことを発端として「人間探求派」という呼称が楸邨に定着した経緯を述べた。「翺雲」の句については「難解」、「難解ではない」、「短歌的な句」という評家の立場を検討して私見を加えた。つまりこの句には、短歌的な声調を含み、その後の句風への転機となっているという。「人

に告ぐべきことならず」とは、「この鱗雲」のように、「自然や時の流れにまかせた方がいいと思われてくる」と論者は解するのである。

第二章「中期作品の考察」では、「楸邨における「父」の存在——冬の浅間は胸を張れよと父のごと」をめぐって——と題して、時代区分②の第八句集『山脈』中の「冬の浅間」の句を取り上げ、楸邨の人間形成に大きな影響を与えた「父」について追究した。クリスチャンであった父の経歴を明らかにし、楸邨の洗礼の詳細をも初めて明確にした。楸邨への父の影響については、以下の三点が考えられる。

一、クリスチャンであった父の世界観を通して、自分の「弱さ」を知ること、また自分の内部にある遙かな生命の存在を信じるという態度を学んだ。

二、父の本棚の多彩な蔵書から学んだ二〇歳までの読書体験が、句作に影響を与えた。本論文において言及した芭蕉解釈や人間探究という句作の態度等にも影響を与えている。

三、駅長職にあった父は旅人の送迎が業であり、その父からの影響で旅を通して「現実に触れることの大切さ」を知る。楸邨は芭蕉の奥の細道を辿り、踏査した体験があるが、それは芭蕉を真に理解するためのものだった。

以上の三点は、いずれも父の無形の遺産であり、楸邨の生涯を考える上に重要である。

□ □  
第三章「後期作品の考察」は一節、二節、三節に分けられ、楸邨の特色を考察する上で重要と思われる俳句三作を対象としている。以下、各節毎に要約する。

第一節「楸邨の「真実感合」と北村透谷の「内部生命論」——「灯の寒きこのしら骨が波郷かな」との関連——においては、第一〇句集『吹越』中の、楸邨の親友石田波郷への追悼句を取り上げた。その結果、楸邨の「真実感合」という句作態度と明治期のキリスト教文学者透谷との親近性が明らかになった。つまり「インスピレーションとは宇宙の精神即ち神なるものよりして、人間の精神即ち内部の生命なるものに対する一種の感応に過ぎざるものなり」（透谷「内部生命論」）と、「自分そのもので立ちむかうのである。そして、そこにあらわれる、自然そのものの真実に感合しなくてはならない」（楸邨「真実感合」）という透谷の「感合」と楸邨の「感合」の類似等を挙げて検証した。さらに透谷が親友島崎藤村に贈った「一本／＼骨の白さよ」という付句と、前掲悼句との共通性に触れ、楸邨の「真実感合」の俳論形成には、透谷の「内部生命論」の摂取があったと指摘し、従来の説にはない新見解を述べた。

第二節「楸邨と正岡子規——「ぼこぼこ暗渠出てきし茄子の馬」の背景——」には、同じく『吹越』中の、この楸邨句と子規句「洪水や下駄

も真桑もほか／＼との間にユーモアへの感興の共通性などが認められることを、他の例句をも上げて論証し、楸邨は戦後の病臥中に子規への理解を深めたという考え方を提示した。

第三節 「楸邨における幻想的作品の解釈―「ふくろふに真紅の手毬つかれをり」の句意―」において、生前最後の第一句集『怒濤』中の掲句への先行批評家の句解を検討し、二歳で亡くなった愛嬢に楸邨が手毬をつかれている、つまり「ふくろふ」は楸邨であり、季語は「ふくろふ」（冬）ではなく「手毬」（新年）であり、掲句は挽歌であるという新解釈を提示した。この論文は学会誌『解釈』（第六〇巻第七・八号、平成二六年七、八月）の巻頭論文として一定の評価を得たものである。

□ □

終章「加藤楸邨の俳句作品の生成と俳句観の推移」では、楸邨の①初期・②中期・③後期の、それぞれの時代を通じて、一五冊に及ぶ俳句作品集と集中の作品、及び楸邨の俳句に関する言説を考察し、その特色を次のように分析して整理した。

- 1、自己の俳句世界の進展への積極的態度
- 2、短歌への嗜好
- 3、クリスチャンであった父から受けた世界観の影響
- 4、子規句鑑賞を通じたユーモアや諧謔への理解の深化
- 5、硯や書などの古美術への興味
- 6、幻想句への志向と実践
- 7、シルクロード等の異質の風土詠への挑戦
- 8、書句という発想
- 9、西鶴研究を経た芭蕉への傾倒

以上、九点に分類できる、これらの楸邨の特質が総合的に作用しあつて、後期の楸邨俳句の形成に作用したとの見解を示した。多彩で独自の句境を構築した後期楸邨の世界を支える文学的土壌を整理し、新しい楸邨像を提示した。

#### 〔結論〕

楸邨は第一句集『寒雷』の「後記」に「真実を求めて揺りたてると、思ひがけない深淵が口を開いてゐる（中略）かうした深淵の中から真

に自分が見出したものを掴みだしたかった。日常の常識と平安の底に、黙々と動いてゐる自分の真の姿を掘りだしたかった。そして、それを（中略）俳句に充填したかった」と記していたが、最晩年に自身の句業を振り返ってこの「後記」をもう一度引き、続けて「それから今日まで私の俳句を作ってきた道は、この平凡な一筋を辿ることに尽きた」と述べている。

単なる「写生」のみでなく、対象に真実を見出し把握することを楸邨は「感合」とよんでいた。「感合」によって「把握」したものを俳句に表現するのが楸邨の「真実感合」の句作態度である。楸邨の生涯に亘る一五編の作品集の句や言説を検討した結果、楸邨はその句作態度を初期・中期・後期にかけて深化させ、自身の「真実感合」の俳句観を確立させたことを実証して本論の結論とした。その句業の全てにおいて、楸邨は「自分の真の姿」を「俳句に充填したかった」といい、自分の「俳句を作ってきた道は」この「一筋を辿ることに尽きた」という。この言葉は、楸邨の「真実感合」の俳句観への自負として聞くことができると論者は結論づけた。

#### 【講評】

以上、目次に沿いながら内容を要約的に紹介した。

全体として、資料の紹介に比重がかかり過ぎ、持論の展開に物足りなさや、論旨や結論にやや曖昧な箇所が見受けられ、又書誌の整理や表記にやや課題が残るが、「加藤楸邨」という研究対象の未開拓の領域を精査し、新資料や作品の新解釈を提示し、日本文学史に新たな俳人像を提出した功績を認めることができる。なお、本論文では人物研究書誌ともいふべき詳細な「加藤楸邨先行研究史」が作成されているが、これは本論を支える基盤として有効であるばかりでなく、それ自体を論者の単独の業績と見ても差し支えない。

本論文の特色の一つは、伝記的調査に基づき楸邨の実像を明らかにし、その俳句観の形成に関与した事績を明らかにした点である。いま一つは、従来難解とされてきた楸邨の俳句作品に、先行の解釈を踏まえ、それらを丹念に吟味した上で、新しい解釈を付与した点である。このような研究方法を通して、本論文がテーマとした楸邨の「作品の生成と俳句観の推移」が浮かび上がってくる。そして、楸邨の行き着いた俳句観であり、またその根底を成す「真実感合」の意義を説明した点に特色がある。

本論文は、粘り強い緻密な調査と考察のうえに成立した独自性のある論文であり、総合的に判断して、博士（文学）論文として、合格の水準にあるものと認められる。

以上。

学位請求論文最終試験報告書

神田 ひろみ

右の者について、学位請求論文に関する審査及び最終試験を行い、その結果審査に合格したものであることを認める。

平成二十七年三月三日

審査委員 主査 半田 美永

(本学教授)

副査 高倉 一紀

(本学教授)

副査 松本 丘

(本学教授)